まえがき――「推す力」を生きて

もはやシニアと呼ばれる年齢となった我が人生とは、いったい何だったんだろう？　時折、ふと考えることがある。

「推し」という言葉を耳にするようになって、ハタと気づいた。ああ、そうか、自分はずっと「推し」ていたんだな、と。

「推し」とは、応援しているアイドル、タレント、芸能人などのことをいう。アイドルファンの周辺から広がった言葉だ。

芥川賞を受賞した小説『推し、燃ゆ』やアニメドラマ『推しの子』などが話題になった。「推し活」という、好きなものを応援する活動を表す言葉が、流行語大賞にノミネートされてもいる。

「推し」という言葉は、ずいぶんと古くからあった。

えっ、いつからあったの？

「推古天皇の時代から」なあんて小ネタを考えたりもして。

面白いのは、「推し」が「推しメン」の略であり、「推しメン」が「推しメンバー」の略であるということだ。アイドルグループで、自分がひいきにしているメンバーの呼称である。なるほど、これはグループアイドルを前提とした言葉なのだ。

日本のアイドル文化は、１９７０年代に始まった。かつての70～80年代との大きな違いは、現在はソロのアイドルが見られなくなったということだ。ほとんどがグループアイドルである。

ＡＫＢ48から派生した48グループや、乃木坂（のぎざか）46を筆頭とするいわゆる〝坂道系〟はグループというより、もはや巨大なアイドル集団だ。現代のアイドルシーンの特徴は、圧倒的に人数が多いことである。そこからファンは自らの「推し」を見つける、という次第。

48グループ、坂道系のプロデューサーは、秋元康（あきもとやすし）。80年代に、おニャン子クラブの作詞家として知られた。おニャン子とＡＫＢ48、乃木坂46の違いは何だろう？

『セーラー服を脱がさないで』や『バレンタイン・キッス』は、女の子が男性に対して呼

びかける恋愛の歌だ。対する『大声ダイヤモンド』（ＡＫＢ48）や『サイレントマジョリティー』（欅坂46）は、一人称が「僕」「僕ら」という男性の側からの呼びかけなのである。

これは、どういうことだろう？

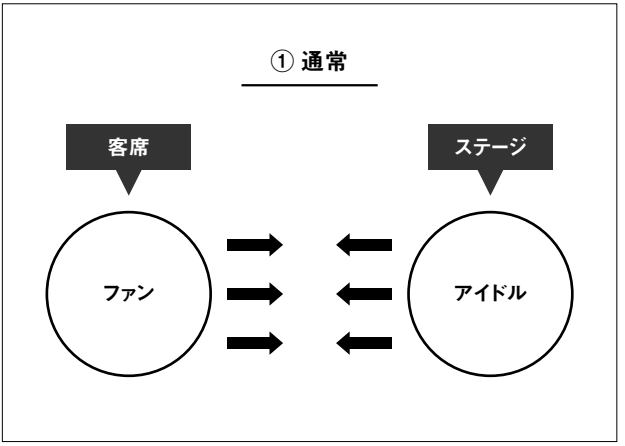
アイドルのライブ空間を次ページのような図にしてみた。

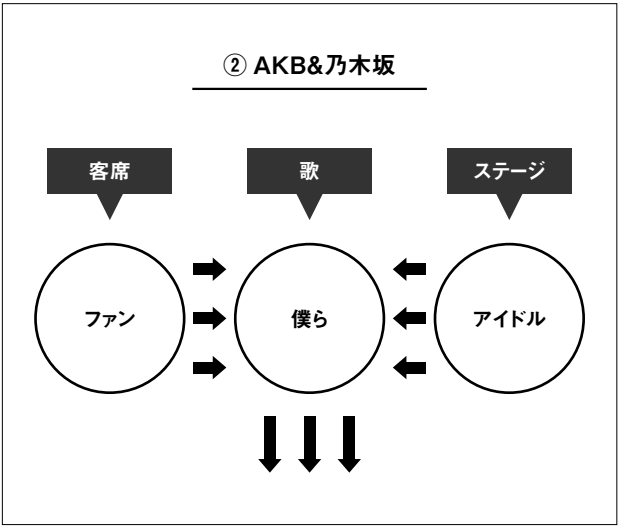
①は通常のスタイルだ。アイドルとファンはステージと客席で向かい合っている。アイドル（女子）が主体（わたし）で、客体（あなた）であるファン（男子）に対して呼びかける恋の歌を唄う（もちろん女子のファンもいるが、ここでは割愛して、男／女の関係に図式化する）。

②がＡＫＢ48や乃木坂46の世界である。アイドルとファンが向かい合っているのは変わらない。しかし、歌の世界では女子であるアイドルが「僕」「僕ら」の一人称で唄うことで、客席のファン（男子）と一体化するのだ。劇場空間とは別の、歌による仮想空間が存在して、そこではアイドルとファンとは同一方向に向かっている。

そう、これが「推す力」ではないか？

ＡＫＢ48が注目を浴びたのは、２０１０年の第２回選抜総選挙で絶対的エースと呼ばれた前田敦子を破って、大島優子がトップに輝いた時だ。その際、彼女はこうスピーチして


① 通常
客席
ステージ
ファン
アイドル


② AKB&乃木坂
客席
歌
ステージ
ファン
僕ら
アイドル

いる。

「私は去年、背中を押してくださいと言いましたが、今年は1位。背中を押してくださいとは言いません。（私に）ついてきてください」

そう、やはりアイドルとファンとは同じ方向を向いているのだ！　ＡＫＢ48には『ポニーテールとシュシュ』という曲もあったが、君のポニーテールを追いかける「僕」は、なるほど同一方向に向かっている。

男子が女子と対面して「押す」というと、強引な恋のくどきを連想する。いわゆる〝壁ドン〟がそうだ（これは「推す力」というより、強引に押す＝雄（オス）の力である）。しかし、大島優子の言うように「背中を押す」、つまり背後に廻って同一方向に力を加えるのが、そう、「推す」ということなのだろう。

１９７０年代、初期のアイドルたちの去り際の言葉に着目したい。「普通の女の子に戻りたい」と叫んでキャンディーズは解散した。「幸せになります」とマイクを置いて、山口百恵は引退・結婚した。自らの幸福を芸能活動より優先したのだ。

２０１０年代のアイドルは、どうだろう？　「私のことは嫌いでも、ＡＫＢ48のことは

嫌いにならないでください」と前田敦子は叫んだ。自身よりもアイドルグループのほうを優先している。自らを「押す」より、自分以外の誰かを「推す」へ。まったく対照的だった。ここにもまた「推す力」、利他的な生き方への方向転換が見て取れる。

最初は向かい合っていた。自らの想いを優先して「押し」ていた。いつしか背後に廻って、誰かの背中を「推し」ている。さながら我が人生のようだ。

幼少期にアイドルに魅せられた。時を経て、ライターとしてその魅力を伝える仕事を続けた。気がつけば、アイドルというジャンルの全体を応援する立場に立っている。

「推す力」を、ずっと生きてきた。

私はこの力こそが、人々を幸福にして、世界を豊かにする、最大のパワーだと信じている。とはいえ、その力の内実を、理屈で説明しつくすことはできない。

そこで自らの生きた「推す力」をたっぷりとつめ込んだこの本を書いたのだ。これは私の人生をかけたアイドル論である。

自分が好きなものを追いかけることが、やがて自分以外のものが棲(す)むこの場所を、この

時代を応援することになる。

そう、「推す」ことは、世界を肯定することなのだ!!